



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



イパフケニ
(鹿笛)



イラスト/安田千夏

最近、シカ多いよね。日高地方を車で走ってたら、道路脇の牧草地を十数頭のシカが私と競争するかのよう疾走。大興奮したけど、今の北海道では案外一番ピュラーな野生動物なのかもね。

シカはアイヌ語ではユク。もともとは獲物という意味で、昔からシカが獲物の代表格だったことの証だとされています。オハウ(汁物)に入れたり干し肉にしたり、サケと並ぶ重要なタンパク源としてアイヌの人々の暮らしを支えてたんでしょうね。

でも実は、アイヌの人たちが獲ったシカの重要性は北海道だけにとどまらないの。本州の武士社会の武具や馬具を作るための重要な交易品として、ものすごい量のシカ皮が津軽海峡を越えていったんですって。たとえば厚真町の遺跡では、シカの骨だけが集中してる場所が数十か所も見つかってる。さらに驚くことに、シカの頭蓋骨部分だけの集中は、アイヌの住居で神様が入りする神聖な窓、つまり「神窓」がある方が多いんですって。アイヌ社会ではイオマンテ、つまりクマやシマフクロウの神様の魂を神様の国に送り返す儀式が知られるけど、シカにはそういう儀式はおこなわないと言われることが多かったの。でもこれはどう考えてもシカの魂送りの跡。研究が進むと新しい姿が少しずつ見えてきますね。



「鍋に火をかけて猟にいつても間に合った」という話がある位たくさん獲れたシカは、ユカツテカムイやユクコロカムイと呼ばれるシカを掌握するカムイ(神)によってこの世に降ろされるもので、人間がシカを粗末に扱おうものならそのカムイの怒りに触れ、シカが獲れなくなるって考えられてきたよね。

かつては、一年を通してシカの生態や習性に合わせた季節毎の猟法があっただよ。冬は雪の中をイヌに追わせ、春から夏には仕掛け弓、秋から初冬の繁殖期には鹿笛を用いた猟などさまざま。鹿笛はイパフケニなどと呼ばれるシカの鳴き声に似た音を出すもので、木片を凸状に削って穴を空け、振動させて音を出すリード部分にはシカの膀胱や耳皮、魚皮などの薄い皮が張られます。シカは強い雄をリーダーに群れで行動するので、鹿笛で雄の鳴き声を出してテリトリーに別の雄が侵入してきたと見せかけたり雌の鳴き声で誘い出して至近距離まで誘き寄せて矢で射るの。

農業被害などで駆除の対象となっているシカですが、肉の栄養価は非常に高い食材。高たんぱくで鉄分も多く、低脂肪なので摂取カロリーを抑えられるから特に女性にはお勧めの食材。近頃では、いろんな料理のレシピも紹介されていますよね。

